

Current Situations and Issues on Ethical Competence in the Basic Nursing Education : Analysis of Literature Published Between 2007 and 2015

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): basic nursing education, literature review, ethical competence of the Gallagher 作成者: 吉岡, 詠美 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/224

看護基礎教育課程における学生の 倫理的能力に関する教育の現状と課題

— 2007年～2015年に発表された文献の分析 —

Current Situations and Issues on Ethical Competence
in the Basic Nursing Education

— Analysis of Literature Published Between 2007 and 2015 —

吉岡詠美¹

Emi Yoshioka

要旨

看護基礎教育課程での看護倫理教育に関する文献を検討し、研究の動向と Gallagher の倫理的能力の構成要素の観点から課題を明らかにし、教育の示唆を得ることを目的とした。2007年から2015年3月に発表された文献の中で「看護倫理」「教育」「看護学生」で検索し、対象は40件だった。

結果、授業形態でみると講義8件、臨地実習27件、その他5件、倫理的能力の構成要素でみると「知ること」3件、「見ること」23件、「知ること／見ること」1件、「振り返ること」8件、「行うこと」、「あること」0件、「その他」5件であった。「知ること」に関する研究は講義、「見ること」と「振り返ること」に関する研究は臨地実習に焦点をあてたものであった。また、教育上の順序性でみると1,2年生は「知ること」が中心で、2,3年生になると「見ること」「振り返ること」に焦点を当てたものであった。

今後、「行うこと」の実態を明らかにするための研究を蓄積する必要性が示唆された。

キーワード：看護基礎教育, 文献検討, Gallagher の倫理的能力

Key words : basic nursing education, literature review, ethical competence of the Gallagher

1. はじめに

現在、医療を取り巻く環境の変化や先進医療、生殖医療の発達に伴い多くの倫理的問題が存在し、看護師は多様な倫理的問題に対応することが求められている。そのためには、人々の健康と生活を支える看護師が、患者の権利を尊重し擁護した上で看護ケアする必要がある。このことを目指し、看護基礎教育課程や病院等、大学院などの卒業後継続教育において看護倫理教育が行われている。

国際看護師協会は、1953年に「ICN 看護師の倫理綱領」を規定し、権利や人権を尊重することを看護の本質として挙げ、看護師が倫理綱領を十分に理解し、身に付け、自己の職務で活用することができるよう倫理的行為の基準を示

した(国際看護師協会, 2012)。日本においては、日本看護協会が1988年に作成した「看護師の倫理規定」を見直し、2003年に「看護師の倫理綱領」と改訂した。「看護師の倫理綱領」の中では、看護師が人権を尊重すること、看護師の行動指針、専門職として引き受ける責任の範囲を社会に対して明示しているが(日本看護協会, 2003)、看護基礎教育課程に関する活用方法や教育方法については述べられていない。倫理的な看護実践について、看護基礎教育課程では、2007年に「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」(厚生労働省医政局看護課, 2007)の中で、看護倫理教育が強化され、さらに文部科学省は倫理的な看護実践を重要な要素として「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」の中で位置付けた(大学に

1 武蔵野大学大学院 看護学研究科 修士課程 母子専攻

における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2011).

これらをうけ、看護倫理のカリキュラムや学習時期、教授法等は、各学校で工夫し、より効果的な看護倫理教育を探究し論文にまとめ報告している。看護倫理教育の効果として、倫理に関する重要諸概念について学習させることで学生の看護倫理への具体的関心が高まり(坂上, 内山, 瀬倉, 丹野, 2008), さらに学生は、事例を通して倫理的ジレンマを体験し状況を捉え倫理的判断することで倫理的感受性が高まる(坂上, 内山, 瀬倉, 2009; 吉本, 八代, 2011) ことが報告されている。また、臨地実習では倫理的な場面を抽出した上で、ディスカッション、カンファレンス、対話を活用した倫理教育の取り組みの成果が報告されている(大畑, 原, 2007; 橋, 宮城, 吉川, 2011; 梅田, 林, 平田, 2012; 山下, 2010)。

勝山, 勝原, 星, 鎌田, ウィリアムソン(2010)は、学生に対する看護倫理教育に関する文献検討において、倫理的态度・対応に関する研究、学生が感じたジレンマ場面の実態に関する研究、学生の道徳的感受性の評価に関する研究を報告している。その中で、臨床現場の倫理的な問題に気づくことができてもその対処法まで学ぶことができていないことや倫理的な知識を持ち合わせていても必ずしも倫理的な態度をとることができないと述べている。また、新井(2007)は看護倫理教育に関する研究は学生の倫理的問題に対する意識調査を行っている段階であり、学年によって倫理的課題が異なること、看護倫理教育の教育方法について研究の蓄積が少ないと述べ、同様に高橋(2011)も看護学生が感じている倫理的ジレンマの分析は、学生の現状把握と教育方法の検討に留まっていることを報告している。これらの文献検討から、看護倫理教育の実践報告を蓄積し教育内容を明らかにしていくことで、より効果的な看護倫理教育を検討していく必要性が示唆された。Fly, and Johnstone(2008/2010, p.246)も、看護実践者と看護教育者の両者によって看護倫理教育の必要性が喧伝されているが、そのような看護倫理教育と内容をどのようにするかが課題である。

看護倫理教育の目的について述べているものをみると、看護倫理教育の目的には、広義のものと狭義のものがあつた。Fly, and Johnstone(2008/2010, pp.246-247)は、看護師の教育モデルに焦点を置き、患者ケアに関する個人的な価値とコミットメントを調べること、倫理的に内省すること、道徳的論理性と道徳的判断の技能を発達させること、研究や実行に関わる倫理的能力を発達させることであると述べている。また、倫理的意思決定に焦点を置いた教育方法についてCassels, and Redman(1989)は、倫理的ジレンマに直面した時に組織的にアプローチすること、枠組みを活用することについて述べている。さらに

学生の看護倫理教育についてDavis, Tschudin, and Raeve(2006/2008, 第20章)は、学生自身が倫理的状况の意味を把握し、解決可能な問題に対して解決できる力を身につけることであると述べ、具体的な教育方法についてGallagher(2006/2008, 第16章)は、倫理的能力モデルを提案し、それに基づき倫理的に「知ること」、「見ること」あるいは知覚すること、「振り返ること」、「行うこと」、「あること」であると述べている。

そこで、今回は「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」(厚生労働省医政局看護課, 2007)がまとめられ、倫理教育が強化された2007年から2015年3月までの文献を検討し、わが国の看護基礎教育の学生を対象とした看護倫理教育に関する研究で学生がどのような倫理的能力を獲得しているのか、研究の動向及びGallagherの倫理的能力の視点から検討し、看護倫理教育の現状と課題を明らかにしたいと考えた。

II. 研究目的

看護基礎教育課程において、学生がどのような倫理的能力を獲得しているのか、研究の動向及びGallagherの倫理的能力の視点から検討し、看護倫理教育の課題を明確にする。

III. 研究方法

1. 研究対象

文献検索データベース、医学中央雑誌Web版 Ver.5を使用し、2007年以降2015年3月までに発表された論文の中から「看護倫理」「教育」「看護学生」全ワード含む文献を「原著論文」に限定して分析した結果、79件だった。抄録を読み、そのうち生命倫理を対象にしている4件、研究倫理を対象としている文献2件、職業倫理を対象としている文献1件、個人情報を対象としている文献4件、助産師学校の学生を対象にしている文献1件、2年課程の学生を対象にしている文献2件、看護師(指導者)を対象にしている文献5件、研究目的が倫理ではない文献20件の計39件を除外して40件を分析対象とした(表1)。

2. 分析方法

対象となる論文40件全ての文献について、研究対象者の教育課程、発表年次、研究デザイン、授業形態、研究内容について分析した。研究内容については、看護基礎教育における授業や実習および看護倫理教育において学生が獲得した倫理的能力を、Gallagher(2006/2008, 16章)の倫理的能力の5つの構成要素のどれに含まれているかを分析した。この5つの構成要素は以下の通りである。

表1 本研究の分析対象とした40文献

文献No.	第一著者 (発表年度)	題目	目的
1	福田(2007)	「看護倫理」の授業後のレポートからみた学生の学びの分析	「看護倫理」の授業終了後の看護学生が記載したレポートの内容から、学びの内容を明らかにする
2	武森(2007)	看護学生がとらえる臨地実習における倫理的問題場面の意味	看護学生がとらえる臨地実習における倫理的問題場面の意味を、看護学生が倫理的問題だととらえた実習体験の記述内容から明らかにする
3	金澤(2007)	当校学生の2年次における倫理的感受性の実態	2年次に学生が臨地実習で遭遇した倫理的問題および倫理的感受性の実態を明らかにする
4	大畑(2007)	老年看護学実習における学生の倫理的ジレンマ	学生が老年看護学実習で感じた倫理的ジレンマの学習内容を分析することで教育的課題を明らかにする
5	金澤(2008)	看護学生の倫理的感受性の変化の実態—2年次と3年次を比較して—	看護学生が臨地実習で遭遇した倫理的問題場面を通して、2年次と3年次の倫理的感受性の縦断的变化の実態を明らかにする
6	信里(2008)	在宅看護論実習で高齢者を訪問した看護学生の倫理的体験	在宅看護論実習で高齢者を訪問した看護学生の倫理的体験について明らかにする
7	佐々木(2008)	看護学生の臨地実習における倫理的問題の遭遇と道徳的感性との関連	「臨床実習での倫理的問題の遭遇の有無により道徳感性に対する反応が異なるか」を探る
8	坂上(2009)	看護学生の「倫理観」育成の初段階における学習効果—平成20年度入学の1年次生調査から—	「看護の倫理」を始めて学ぶ入学初期段階の学生が「看護学原論」の講義で学習した内容の学習効果
9	田村(2009)	看護学生が臨地実習で認識した倫理的意思決定場面	看護学生が臨地実習場面で認識している倫理的状况を明らかにし、サラ・T. フライの善行、正義、自律、誠実、忠誠である倫理原則に基づいて分類し、倫理的意思決定をするうえで基盤になるものを明らかにする
10	高田(2009)	看護学生における「患者の人権・看護倫理の重要性」感得のプロセス—「基礎看護学実習Ⅰ」を通して—	学生の実習における体験の振り返りから、患者の人権と看護の倫理について考える機会とした「基礎看護学実習Ⅰ」における学生の体験と学びのプロセスを明らかにする
11	隅元(2009)	看護学生の倫理的態度の変化と影響要因	2004年に実施した倫理的態度に関する因子分析の結果を基に、同一学生である3年生に調査を実施し、看護基礎教育による看護学生の倫理的態度の変化とその影響要因を明らかにする
12	富(2009)	看護学生が成人看護学実習で体験した倫理的問題と状況認識	学生が成人看護学実習で体験した倫理的問題とその状況の認識を明らかにする
13	土井(2009)	小児看護学実習過去5年間の倫理カンファレンスレポート分析	倫理に対する学生の意識を高めることを目的に行っていたテーマカンファレンスの取り組みが、学生の学びにどのような影響を与えているかを明らかにする
14	山下(2010)	臨地実習をとおして倫理を学ぶ：小児看護における学生の体験事例を用いた試み	小児看護学実習で学生が遭遇した倫理的問題事例をセミナー形式で教員と学生とで対話をしながら、問題解決モデルを用いて系統的に検討する
15	土路生(2010)	小児看護学実習における倫理教育の検討 討議前後における意見の変化—倫理的ジレンマに関する学生の自由記述の内容分析から—	小児看護学実習で看護学生が倫理的ジレンマを感じた内容を明らかにし、小児看護学実習における倫理に関する教育的支援を検討
16	土井(2010)	臨地実習での看護学生が感じる倫理的葛藤	看護学生が臨地実習中に体験した医療倫理に関する調査を実施し、看護基礎教育における倫理教育の在り方を検討する
17	山川(2010)	本校における倫理教育プロジェクトとその成果—倫理教育プロジェクトは学生の倫理観向上に役立ったのか—	本校の教育理念を受けて、看護の対象となる患者・家族の裁量権や知る権利を支えるために、看護者としての自立した倫理観の基盤を形成するとともに、生涯に亘って追及し続ける姿勢を育成する
18	菅沼(2010)	看護学生の倫理的問題及び倫理的判断能力に関する研究—臨地実習場面の振り返りから教育のあり方を考える—	臨地実習において遭遇した倫理的問題及び倫理的判断能力の実態を明らかにし、看護教育のあり方を考察する
19	吉川(2010)	基礎看護学における事例を用いた看護倫理教育の評価	基礎看護学の「看護学概論」において、事例に基づいた看護倫理教育の実践を学生のアンケートに基づき評価する
20	橘(2011)	小児看護学実習で看護学生が学んだ子どもの権利を尊重した関わりについて	実習を終了した学生が、実習での体験を通して学んだ子どもの権利に対する認識とそれを守るためのケアを明らかにする
21	吉本(2011)	看護系大学1年生が考える倫理的判断の拠り所	看護系大学1年生がどのような拠り所をもとに倫理的判断を行うのか、その傾向を明らかにする
22	関谷(2011)	初めての臨地実習において看護学生が抱いた倫理的な疑問	初めての臨地実習において、看護学生が倫理的な疑問を抱いた場面や内容について明らかにする
23	高橋(2011)	基礎看護学実習Ⅱで学生が気づいた倫理的場面	基礎看護学実習Ⅱ終了後の看護学生が基礎看護学実習中において「倫理的に問題がある」と気づいた場面から、学生の倫理的視点を明らかにする
24	高尾(2011)	小児看護学実習における倫理の学び—学生のレポートから分析—	小児看護学実習における倫理の学びを学生のレポートから明らかにする
25	谷口(2011)	臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と対処行動—コールバーグ理論に基づいて—	看護学生が臨地実習中に体験した倫理的葛藤の内容を分析し、看護基礎教育における倫理的葛藤を感じた学生の対処行動を明らかにする
26	北川(2011)	臨地実習において看護学生が倫理的判断を要する場面	臨地実習で看護学生自身が倫理的判断を要した場面を調査し、今後の講義や実習での倫理教育のあり方について検討する
27	小野(2011)	臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と教育上の課題	臨地実習で看護学生が感じた倫理的葛藤の把握と教育上の課題を明らかにする
28	北川(2011)	臨地実習で看護学生が感じる倫理的問題場面	看護学生が臨地実習の場で、どのくらいの学生が倫理的問題場面と感じているのか、どのような倫理的問題場面で遭遇しているのかを知り、今後の学内や臨地実習での倫理教育の在り方について、検討する
29	平野(2011)	がんサロン訪問における「患者・家族の声を聴く」看護学生の倫理的学び	がん患者とその家族が集い、情報交換や交流を行なうがんサロン訪問における「患者・家族の声を聴く」ことからの学生の倫理的学びを明らかにする
30	佐々木(2012)	看護倫理を学ぶ看護学生の学習効果—学習時期(2年次と3年次)による比較—	看護倫理を学ぶ看護学生の学習時期(2年次と3年次)の違いによって、受講後の学習効果や倫理観に差が生じるかを明らかにする
31	土井(2012)	Defining Issues Testを用いた入学時看護学生の道徳判断の現状—ケアの倫理と正義の倫理の論争に伴うジレンマストーリーを用いて—	看護基礎教育機関における入学時看護学生の道徳性発達はどのような段階と傾向があるかを明らかにする
32	今野(2012)	寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を犯さないための倫理教育の実践	寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を犯さないための倫理教育を実践し、倫理観の涵養が目的
33	押領司(2012)	看護学生が精神看護学実習で体験した倫理的課題と学び	看護学生が精神看護学実習中に体験した倫理的課題に関する場面や状況や倫理的葛藤、学びについて明らかにする
34	梅田(2012)	小児看護学実習における子どもの権利に関する学生の学び	小児看護学実習を通し看護学生が子どもの権利についてどのような学びを得ているのか、実態を明らかにする
35	信里(2012)	精神看護学実習における看護学生の倫理的体験	看護学生の精神看護学実習における倫理的体験について明らかにする
36	指方(2012)	看護学生の倫理的感受性に影響する要因	看護学生の倫理的感受性と看護学生の背景や看護倫理に関する授業科目の受講との関連、および向社会的行動との関連を明らかにする
37	竹村(2012)	カリキュラム改正後の看護学生の倫理的感受性に関する実態調査(第一報)	A看護専門学校(3年課程)の基礎看護学実習Ⅰ前後のMoral Sensitivity Testを分析し、学生の倫理的感受性に関する実態を明らかにする
38	正村(2013)	卓越した看護実践の基盤としての「倫理」患者を大切に看護するとはどういうことか	「患者を大切に看護する」とはどういうことかを明らかにし、わかりやすく示すことが目的
39	島田(2014)	小児看護学における倫理教育の教授活動の検討	看護学生に、日本看護協会の看護倫理の事例検討編「患児へのインフォームド・アセントをどのように展開するか—両親が拒否する場合」の事例を用いて、グループワークを利用した教育活動から、学生がどのような意思決定を捉え、倫理的判断力を考えたかの学びを把握する
40	武用(2014)	事例検討を通した学生の倫理的問題に対する気づきと判断能力	看護系大学4年次生によるグループディスカッションを行った事例検討の内容から、学生の倫理的問題に対する気づきと判断能力を検討し、学生の看護倫理に対する指導法の示唆を得る

- 「知ること」；倫理的能力の知識面の促進のことをいい、医療の中では専門職の役割とその歴史的・倫理的基盤を十分認識すること、個人的、専門的、理論的倫理を区分する能力をいう。
- 「見ること」；倫理的能力の知覚面の促進のことをいい、全人的に人を捉え、一般的な反応パターンを理解し、個人の固有性を理解するように努め、医療では健康や病気の体験をより良く理解するように努めることにより、状況の倫理的構成要素を見出す能力をいう。
- 「振り返ること」；倫理的能力の内省面の促進のことをいい、実践上の出来事あるいは状況を評価するために倫理的概念・思想・理論を吟味し、自己だけでなく同僚・友人などの倫理的見識からも学びそれを活用する能力をいう。
- 「行うこと」；倫理的能力の行動面の促進のことをいい、他者との関係において倫理的に行為する能力をいう。
- 「あること」；倫理的能力の資質面の促進のことをいい、倫理的な特質あるいは性質を示すあり方であると説明している。

本分析は、すべての分析過程において看護学研究者と検討し分析の妥当性を高めた。

IV. 結果

1. 倫理教育に関する研究の動向

1) 研究対象者、発表年次

研究対象者の教育課程は大学15件、短期大学4件、専門学校20件、大学と専門学校1件であった。発表年次毎の文献数は1件～10件の範囲内であり、2011年が最も多

く10件であった(表2)。

2) 研究デザイン

研究デザイン別にみると、質的研究は23件であった。アンケート調査における自由記述の分析10件、講義と臨地実習でのレポート11件、インタビューの分析2件であった。量的研究は、17件でありすべてアンケート調査であった。対象は学生で1校のみ12件と複数校は5件であった(表3)。

3) 授業形態

授業形態でみると、「講義」8件、「臨地実習」27件、「その他」5件であった。

「講義」では、事例検討を通して学生が倫理綱領や倫理原則を手がかりに倫理的判断していくなどの学習成果について報告されていた。その他には、2年生と3年生を対象に看護倫理に関する知識の学習時期を検討しているものがあつた。「臨地実習」では、学生が臨床場面で体験した倫理的問題やジレンマの実態を検討したものが18件であった。さらに体験した倫理的問題について、意思決定モデルやワークシートを活用した振り返りが8件であった。「その他」では、講義や臨地実習には関係せず学生の資質について道徳的な視点からスケールを用いて実態調査をしたもの、2年生と3年生の倫理的感受性を縦断的に調査したものがあつた。

2. Gallagher (2006/2008) の倫理的能力の5つの構成要素からみた研究内容

実践されている看護倫理教育内容を、倫理的能力の構成要素の視点から、どれに含まれているかを分析した結果、

表2 発表年次毎

発表年次	大学				計
	大学	短期大学	専門学校	大学と専門	
2007	1		3		4
2008		1	2		3
2009	3	1	2		6
2010	2	1	3		6
2011	5	1	4		10
2012	2		5	1	8
2013	1				1
2014	1		1		2
計	15	4	20	1	40

表3 研究デザインによる分類

分類	件数
質的研究	23
量的研究	17
計	40

表4 倫理的能力の構成要素

倫理的能力	大学				計
	大学	短期大学	専門学校	大学と専門	
知る	3				3
見ることと振り返ること	6	1	15	1	23
振り返ること	5	1	2		8
行うこと					0
あること					0
その他	1	1	3		5
計	15	4	20	1	40

表5 学年毎の倫理的能力の構成要素

倫理的能力	教育課程						数字は件数	
		1年	2年	3年	4年	複数学年等	計	
知る	計	1	1			1	3	
	3年課程							
	4年課程	1	1			1	3	
見る	計	3	2	9	2	7	23	
	3年課程	1	1	9		1	12	
	4年課程	2	1		2	6	11	
見ることと振り返ること	計			1			1	
	3年課程			1			1	
	4年課程							
振り返る	計	2	1	5			8	
	3年課程	1	1	1			3	
	4年課程	1		4			5	
行う							0	
あること							0	
その他	計	1		3		1	5	
	3年課程	1		3		1	5	
	4年課程							
計		7	4	18	2	9	40	

「知ること」は3件、「見ること」は23件、「見ること」と「振り返ること」は1件、「振り返ることは」は8件、「行うこと」「あること」は0件、その他は5件であった（表4）。これを学年毎で見ると、「知ること」は1、2年生に、「見ること」と「振り返ること」は3年生が最も多かった（表5）。

1) 「知ること」

「知ること」に分類された3件は、すべて講義の成果について検討したものであった。倫理に関する講義の学習効果を明らかにするために、坂上ら（2009）は、「IC」「患者の権利擁護」「守秘義務」「個人情報保護」の知識の教授と身近にある具体例を事例展開し、学生が権利を尊重した関わり方、自分の価値だけではなく異なる価値から考えられたことを報告している。また今野ら（2012）は、2年生を対象に「高齢社会の権利擁護」と「終末期における看護ケア」について教授し、学生が寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を犯さないための自己の関わりを考察でき、倫理観の涵養に繋がったと報告している。さらに、学習時期が、学習効果や倫理観の学びに差が生じるかを明らかにするために、佐々木ら（2012）は2年生と3年生を対象に看護倫理を教授した後に質問紙調査をした結果、「アドボカシー」と「パターナリズム」では、3年生の方が深く理解していたと報告している。

2) 「見ること」

「見ること」に分類された23件と「見ること」「振り返ること」の1件を合わせた24件の内訳は、臨地実習21件、講義2件、道徳的感性について調査したものの1件であった。このうち臨地実習に関する研究は、学生が臨床の中で体験している倫理的問題やジレンマに関する研究であった。学生が捉えていた問題やジレンマは、臨地実

習で患者を人として尊重していないケア、患者自身が意思決定できない、個人情報保護されていない、プライバシー（羞恥心等）が保護されていない、患者の安全と抑制、行動制限、スタッフ間の関係性のなさ等であった（土井ら、2010；福田、林、伴藤、2007；金澤ら、2007；北川、2011a；北川、2011b；小野ら、2011；押領司、佐藤、2012；指方ら、2012；佐藤、2012；信里ら、2012；関谷、2011；高橋ら、2011；平野ら、2011；菅沼ら、2010；信里ら、2008；武森ら、2007；田村、湯浅、中林、杉原、2009；谷口ら、2011；富、2009；土路生ら、2010；金澤、2008；山川ら、2010）。

講義に関する研究では、倫理的な分析能力を高めるための教育に関する研究があった。武用ら（2014）は、臨地実習前の4年生を対象に、「薬を飲んでいないことを黙っていて」と言われた事例を用いて討議した結果、学生が倫理綱領や倫理原則を手がかりに倫理的問題に気づき倫理的判断していることを報告している。また、吉本ら（2011）は、1年生を対象に、患者の希望を叶えるか叶えないかという相反する倫理的判断を含む事例を展開した結果、学生が看護実践に重要な善行と無害の原則を拠り所に倫理的判断していることを報告している。

学生の道徳的感性に関する研究は、既存の質問紙で調査したものであった。佐々木（2008）は、臨地実習が終了した3年生を対象に、Lutzenが開発したMSTをもとに中村らが一部改正したものを用いて調査した結果、道徳感性に対する反応は倫理的問題遭遇群の方が高かったと報告している。

3) 「振り返ること」

「振り返ること」に分類された8件と「見ること」「振り返ること」の1件を合わせた9件は、臨地実習7件、講義2件であった。このうち臨地実習に関する研究は、臨地

実習終了後に倫理的問題をレポートで振り返った3件、倫理的問題を討議や対話で検討した4件であった。実習後のレポートで倫理の学びを明らかにしたものとして、高尾(2011)は、小児看護学実習後のレポートの分析を通して、学生が自分の体験した場面を倫理的な視点で振り返っていたことを報告している。また梅田(2012)は、小児看護学実習後のレポートを分析し、学生が遊びとコミュニケーションと家族との関わりの場面から、子どもの権利を意識した学びを得ていたと報告している。富(2009)は、臨地実習で体験した事例の振り返りを課した結果、学生が倫理的問題に気づき、その状況を推論していたことを報告していた。さらに倫理的問題を討議や対話で検討したものとして、実習終了後のグループ討議を通して人権や倫理について学びを得て必要な看護を導き出すことができたことを報告している(橋ら, 2011; 高田ら, 2009)。また、実習で体験した倫理的問題事例を4ステップモデルで振り返り対話することで、「仕方がないのかな」としていた問題を、根拠をもった判断を導くことができたこと(山下, 2010)、ワークシートを活用して、倫理的ジレンマを感じた場面を再構成することで、倫理的配慮について考えることができたこと(大畑, 原, 2007)を報告している。

講義に関しては、事例討議を用いた方法を取り上げたものがあつた。島田ら(2014)は、「患児へのインフォームド・アセントをどのように展開するか—両親が拒否する場合」の事例で、グループワークした結果、学生が患児の思いをイメージできていたと報告している。吉川ら(2010)は、1年生を対象に事例を漫画で提示し討議することで、臨地実習の経験がない学生にも事例のイメージができ、看護倫理の動機づけ、意識の向上につながったと報告している。

4) 「行うこと」「あること」

「行うこと」「あること」に分類された文献は、今回の文献検討ではなかった。

V. 考察

1. 倫理教育に関する研究の動向

臨地実習での体験から学生の倫理的能力の実態を明らかにする文献が多く、講義に関する文献は少なかった。教育方法について中尾(2007)は、看護倫理教育が知識の伝達のみになっていないかと指摘しており、同様に勝山ら(2010)も、看護倫理に関する教育が知識の教授に止まっており、倫理的判断ができるようになるための教育方法について教員が模索していると述べている。またDavis & 小西(2006/2008, 第18章)も、日本は従来、教員が知識を教授する講義形式が主であり、クリティカルシンキング

の育成には限界があり、対話や議論が必要であると提言している。今回の検討では、文献数は3件と少なかったが、知識の伝達だけではなく講義の中で倫理に関する基礎知識を教授した上で、事例検討を行い授業検討されていた(坂上ら, 2009; 武用ら, 2014; 吉本ら(2011)。本研究では、臨地実習において、学生は多くの倫理的体験をし、そこから倫理的能力を獲得していることが明らかになったことから、知識を教授する講義と有機的に連携する授業のあり方を模索することの必要性が示唆された。大畑らも、学生が臨地実習を通して看護体験を倫理的に「見ること」ができ、倫理的問題やジレンマを捉え、その倫理的問題を「振り返る」ためにディスカッション、カンファレンス、対話といったツールを活用し行動を導くことができていたことを示唆していた(大畑, 原, 2007; 橋ら, 2011; 梅田ら, 2012; 山下, 2010)。一方、「行うこと」「あること」の倫理的能力獲得に関する研究はなかった。今後の課題として、「行うこと」の実態を明らかにするために研究を蓄積することの必要性が示唆された。

2. 倫理的能力の構成要素の順序性と教育

Gallagher(2006/2008, 第16章)の倫理的能力の5つの構成要素を教育上の順序性でみると、1年生と2年生は「知ること」、3年生になると「見ること」「振り返ること」によって倫理的能力が獲得されていた。

鶴若, 川上(2013)は、看護学士課程の「看護倫理」のカリキュラム及びシラバスをホームページ上に公開している193校を対象に、教授している内容や科目について検討し、科目内容は倫理学の基礎と原則、生命倫理総論、看護倫理、事例検討等であった。また開講時期が、2年30%、4年26%、3年24%、1年16%、複数学年2%であると報告している。本研究の結果も知識の教授に関係する「知ること」に関する研究は、1, 2年生が中心に報告されていた。教育戦略として、Gallagher(2006/2008)は、「知ること」の講義は最も受動的な教育方法であるが、少人数のセミナーは実践経験を共有し事例を分析して、倫理的問題あるいはそれが起こったいきさつを明らかにすることであると述べている。本研究でも、単に知識の教授のみではなく、講義の中で事例を通して倫理的行動について考えられていたが、今後は少人数のセミナーなどより討議できるような学習環境を整えていく必要があると考える。

「見ること」「振り返ること」は、2, 3年生を対象に研究がなされていた。これは、学生が看護体験を通して倫理的問題の特定やその対処法について、臨地実習の中で学ぶことが重要であり、学習効果として高いと推測される。

「見ること」についてGallagher(2006/2008)は、倫理的知覚は倫理的能力の重要な部分で、その場の状況を知覚

し捉え倫理的想像力を働かせなければ、良い対応はできる見込みがないと述べている。本研究でも、臨地実習での自己の看護体験を通して倫理的問題を捉えられていることが示唆された。しかし、倫理的問題として知覚している内容については検討されているが、学生が倫理的に問題であると捉える過程については報告されていないため、吟味していく必要があると考える。Gallagher (2006/2008) は、医療人文学、特に文学は専門職が見たり知覚する能力を高めること、物語やナラティブについて考えることは学生が患者の視点を理解する能力を発達させる助けとなり、臨地実習前の「宿題」として出すことも可能であると述べている。しかし、今回の研究では、学生が捉えている倫理的問題場面の特定に焦点をあてたものが多く、教育については倫理的な分析能力を高めるために行われた事例のみの報告であった。今後、さらに教授法に関する研究を蓄積していく必要があると考える。

「見ること」に関する文献の多くは「臨地実習」に関するものであったため、今後は「講義」や臨地実習前の事前学習の中でも教育を行い、その学習成果について研究を蓄積していくことで、学生の倫理的な分析能力をより高めることができると考える。

「振り返ること」の倫理的能力獲得に関する文献は、実習終了後のレポートや4ステップモデルといった意思決定モデル、ワークシートの活用が効果的な教育方法だと示されていた。実習終了後に自己の体験をレポートに記載することや、4ステップモデルで振り返り対話すること、ワークシートで場面を再構成することで根拠をもった判断を導くことができたことを報告していることから、それらが倫理的問題の振り返りを検討するツールとして有効であると考えられる。Gallagher (2006/2008) は、学生自身が捉えた倫理的問題に対して、どう行動すべきであるかを導き出す教育として、倫理的な思考や概念や理論、専門職としての実践や人々や出来事、自分自身について振り返ることが有効であると述べている。今回の研究でも、授業内容や方法の検討、倫理的問題を自由に話し合える環境調整、事例討議やグループワークなどの教授法の検討を提言していた。

Gallagher (2006/2008) は、学生がすべての倫理的能力の構成要素を備えておく必要性を提言しており、「学士課程版実践能力と到達目標」の中でも卒業時の到達目標として人間の尊厳及び人権の意味を理解し、擁護に向けた行動をとることができることを挙げられている（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2011）。しかしながら、本研究では「行うこと」「あること」の倫理的能力獲得について検討された報告はなかった。その理由として示唆されるものは、1つはGallagher (2006/2008) が専

門職の実践における倫理的行動は微妙で捉え難いと述べているように、学生の倫理的行動を評価することの難しさがあるのではないかと考える。2つは、現在学生が体験している倫理的問題の把握や教育に関する研究の中では振り返る教育に留まっており、「行動すること」の倫理的能力獲得に関して検討が進んでいないのではないかと考える。

VI. 結 語

倫理教育に関するわが国の現状と課題について論文40編を検討し、以下の結果を得た。

1. 研究で取り上げられている授業形態

「講義」が8編で、「臨地実習」は27編、「その他」の5編は、講義や臨地実習には関係せず学生の資質について道徳的な視点からスケールを用いた実態調査であった。

2. 倫理的能力の5つの構成要素

1) 「知ること」は3編、「見ること」は23編、「見ること」「振り返ること」は1編、「振り返ることは」は8編、「行うこと」「あること」は0編、その他は5編であった。

学生が臨地実習を通して看護体験を倫理的に「見ること」ができ倫理的問題やジレンマを捉え、その倫理的問題を「振り返る」ためにディスカッション、カンファレンス、対話といったツールを活用し行動を導くことができていることが示唆された。しかし、「行うこと」「あること」に関する研究はなかった。

2) 学年毎の倫理的能力の構成要素で分析した結果、1年生と2年生は「知ること」、3年生になると「見ること」「振り返ること」に焦点を当てた文献であった。

3. 倫理教育の課題

今後の課題として、「見ること」に関する文献は、臨地実習が中心であったことから、「講義」や臨地実習前の事前学習の中でも教育を行い、その学習成果について研究を蓄積していくことで、学生の倫理的な分析能力をより高めることができる可能性が示唆された。また、「行うこと」の実態を明らかにするために研究を蓄積することの必要性が示唆された。

謝辞

最後に本研究を作成するにあたり、ご指導を頂きました本学草場ヒフミ教授に心より感謝致します。ありがとうございました。

引用文献

- 新井龍 (2007). 我が国の看護系大学における倫理教育の現状と課題—過去5年間の先行研究の文献検討より—. *滋賀医科大学看護学ジャーナル*, 5(1), 138-141.
- Cassels, & Redman. (1989). Preparing students to be moral agents in clinical nursing practice: report of a national study. *Nursing Clinics of North America*, 24, 463-473.
- Davis, A. J., Tschudin, & 小西恵美子 (2006/2008). 第18章日本における看護倫理の教育. 小西恵美子 (監訳), *看護倫理を教える・学ぶ倫理教育の視点と方法* (pp. 214-224). 東京: 日本看護協会出版社.
- Davis, A. J., Tschudin, V., & Raeve, L. D. (2006/2008). 第20章看護倫理教育の将来. 小西恵美子 (監訳), *看護倫理を教える・学ぶ倫理教育の視点と方法* (pp. 241-255). 東京: 日本看護協会出版社.
- 土井英子 (2012). Defining Issues Test を用いた入学時看護学生の道徳判断の現状 ケアの倫理と正義の倫理の論争に伴うジレンマストーリーを用いて. *インターナショナル Nursing Care Research*, 11(4), 183-192.
- 土井英子, 小野晴子, 山下妙子, 氏平美智子, 石本陽子, 谷口さゆり (2010). 臨地実習での看護学生が感じる倫理的葛藤. *岡山県看護教育研究会誌*, 34(1), 9-12.
- 土井満美子, 沼元千江, 立石由香, 坂手佐千子 (2009). 小児看護学実習過去5年間の倫理カンファレンスレポート分析. *津山中央病院医学雑誌*, 23(1), 123-127.
- 遠藤由美子 (2012). 教育者側に焦点を当てた看護倫理教育に関する研究の動向と課題. *医療保健学研究*, 3, 125-135.
- Fly, S. T., & Johnstone, M. J. (2008/2010). 片岡範子, 山本あい子 (訳), *看護実践の倫理 倫理的意思決定のためのガイド* (第3版). 東京: 日本看護協会出版社.
- 福田明美, 林初美, 伴藤典子 (2007). 「看護倫理」の授業後のレポートからみた学生の学びの分析. *中国四国地区国立病院附属看護学校紀要*, 2, 18-26.
- Gallagher, A. (2006/2008). 第16章看護倫理の教育: 倫理的能力の促進. 小西恵美子 (監訳), *看護倫理を教える・学ぶ倫理教育の視点と方法* (pp. 188-206). 東京: 日本看護協会出版社.
- 平野文子, 別所史恵, 坂根可奈子 (2011). がんサロン訪問における「患者・家族の声を聴く」看護学生の倫理的学び. *鳥根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要*, 5, 179-188.
- 稲葉佳江 (2009). 看護学教育における看護倫理の基礎形成に関する教授学的検討. *旭川医科大学研究フォーラム*, 10, 23-40.
- 勝山貴美子, 勝原裕美子, 星和美, 鎌田佳奈美, ウィリアムソン彰子 (2010). 過去5年間の倫理に関する研究の特徴と今後の課題. *日本看護倫理学会誌*, 2(1), 77-86.
- 国際看護師協会 (2012). ICN 看護師の倫理綱領. <https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/pdf/icn-codejapanese.pdf> [2015.9.23]
- 厚生労働省 (2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> [2015.9.23]
- 北川さなえ (2011a). 臨地実習において看護学生が倫理的判断を要する場面. *東京厚生年金看護専門学校紀要*, 13(1), 1-4.
- 北川さなえ (2011b). 臨地実習で看護学生が感じる倫理的問題場面. *東京厚生年金看護専門学校紀要*, 12(1), 1-4.
- 金澤暁民 (2008). 看護学生の倫理的感受性の変化の実態—2年次と3年次を比較して—. *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 4, 246-249.
- 金澤暁民, 伊藤由紀枝, 片常石光美, 口藏真由美, 榎洋子 (2007). 当行学生の2年次における倫理的感受性の実態. *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 3, 294-297.
- 今野弘子 (2012). 寝たきり患者や重度の認知症高齢者の尊厳を犯さないための倫理教育の実践. *東北文化学園大学看護学科紀要*, 1(1), 25-33.
- 正村啓子 (2013). 卓越した看護実践の基盤としての「倫理」患者を大切にすることはどういうことか. *医学と生物学*, 6(3), 1207-1219.
- 文部科学省 (2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm. [2015.9.23]
- 中尾久子 (2007). 看護教育者の倫理問題の認識と倫理教育との関連性. *九州大学医学部保健学科紀要*, 8, 69-76.
- 日本看護協会 (2003). 看護師の倫理綱領. <https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/rinri.html> [2015.9.23]
- 信里ユリエ, 小林淳子, 武森八智代, 山本昭子, 曾根美沙, 玉川緑 (2008). 在宅看護論実習で高齢者を訪問した看護学生の倫理的体験. *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 4, 242-245.
- 信里ユリエ, 井原美由紀, 片岡睦子 (2012). 精神看護学実習における看護学生の倫理的体験. *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 7, 184-187.
- 小野晴子, 土井英子, 山下妙子, 氏家美智子, 石本陽子, 谷口さゆり (2011). 臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と教育上の課題. *日本看護学会論文集: 看護管理*, 41, 156-159.
- 大畑政子, 原祥子 (2007). 老年看護学実習における学生の倫理的ジレンマ. *鳥根県立大学医学部紀要*, 30, 1-9.
- 押領司民, 佐藤みつ子 (2012). 看護学生が精神看護学実習で体験した倫理的課題と学び. *看護教育研究学会誌*, 4(2), 23-29.
- 坂上百恵, 内山美枝子, 瀬倉幸子 (2009). 看護学生の「倫理観」育成の初段階における学習効果 平成20年度入学の1年次生調査から. *新潟大学医学部保健学科紀要*, 9(2), 3-11.
- 佐々木理恵子 (2008). 看護学生の臨地実習における倫理的問題の遭遇と道徳的感性との関連. *日本赤十字秋田短期大学紀要*, 12, 7-19.
- 佐々木新介, 堀理江, 藤野文代 (2012). 看護倫理を学ぶ看護学生の学習効果～学習時期(2年次と3年次)による比較～. *ヒューマンケア研究学会誌*, 4(1), 23-27.
- 指方明美, 佐川ひろ子, 上野典子, 湯本美穂, 船木加代, 森千鶴 (2012). 看護学生の倫理的感受性に影響する要因. *日本看護学教育学会誌*, 21(3), 37-47.
- 関谷由香里 (2011). はじめての臨地実習において看護学生が抱いた倫理的な疑問. *日本看護学会論文集: 看護教育*, 41, 90-92.
- 島田真由美, 村上ヒトミ, 西川裕美 (2014). 小児看護学における倫理教育の教授活動の検討. *神奈川総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要*, 4, 29-32.
- 菅沼澄江, 安藤高子, 松元由美 (2010). 看護学生の倫理的問題及び倫理的判断能力に関する研究 臨地実習場面の振り返りから教育のあり方を考える. *日本看護学会論文集: 看護教育*, 40, 48-50.
- 菅沼澄江, 根岸京子, 高野公子 (2012). 看護学生の臨地実習における看護倫理面での指導の現状 臨地実習指導者の立場から. *東都医療大学紀要*, 2(1), 66-73.

- 隅元佐代子, 田中多恵子, 菊地俊子, 本間景子, 古瀬敬子, 佐野ちづる, 森秀子, 入山玲子, 小川光子, 窪田好恵 (2009). 看護学生の倫理的態度の変化と影響要因. *済生*, 85 (7), 47-49.
- 橘則子, 宮城由美子, 吉川未桜 (2011). 小児看護実習で看護学生が学んだ子どもの権利を尊重した関わりについて. *福岡県立大学看護学研究紀要*, 8 (1), 19-25.
- 高田直子, 新井龍, 井村香積, 作田裕美, 坂口桃子 (2009). 看護学生における「患者の人権・看護倫理の重要性」感得のプロセス「基礎看護学実習Ⅰ」を通して. *滋賀医科大学看護学部看護学科*, 7 (1), 31-34.
- 高橋永子, 平瀬節子, 野村晴子 (2011). 基礎看護学実習Ⅱで学生が気づいた倫理的場面. *インターナショナル Nursing Care Research*, 10 (2), 29-38.
- 高尾賢司 (2011). 小児看護学実習における倫理の学び 学生のレポートから分析. *京都府立医科大学看護学科紀要*, 21, 37-42.
- 武森八智代, 青木早苗, 竹村多加, 信里ユリエ, 美馬夕布子, 玉川緑 (2007). 看護学生がとらえる臨地実習における倫理的問題場面の意味. *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 2, 27-38.
- 竹村多加, 小林淳子 (2012). カリキュラム改正後の看護学生の倫理的感受性に関する実態調査(第一報). *中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*, 7, 180-183.
- 武用百子 (2014). 事例検討を通じた学生の倫理的問題に対する気づきと判断能力. *和歌山県立医科大学保健看護学部紀要*, 10, 31-39.
- 田村美子, 湯浅節, 中林美恵子, 杉原トヨ子 (2009). 看護学生が臨地実習で認識した倫理的意思決定場面. *日本看護学会論文集：看護協会*, 39, 328-330.
- 谷口さゆり, 石本陽子, 氏平美智子, 山下妙子, 土井英子, 小野晴子 (2011). 臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と対処行動 コールバーグ理論に基づいて. *岡山県看護教育研究会誌*, 35 (1), 11-20.
- 富律子 (2009). 看護学生が成人看護学実習で体験した倫理的問題と状況認識. *川崎市立看護短期大学紀要*, 14 (1), 109-115.
- 土路生明美, 鴨下加代, 松森直美 (2010). 小児看護学実習における倫理教育の検討 討議前後における意見の変化. *日本看護学会論文：看護教育*, 40, 212-214.
- 鶴若麻理, 川上祐美 (2013). シラバスからみる看護学士課程の「看護倫理」教育. *日本看護倫理学会誌*, 5 (1), 71-75.
- 梅田寧美, 林カオリ, 平田美紀 (2012). 小児看護学実習における子どもの権利に関する学生の学び. *日本看護学会論文集：看護教育*, 42, 84-87.
- 山川由加, 守本俊子, 佐藤真由美, 藤澤由里子, 吉田さとみ, 西山裕子 (2010). 本校における倫理教育プロジェクトとその成果—倫理教育プロジェクトは学生の倫理観向上に役立ったのか—. *大阪医科大学付属看護専門学校紀要*, 16, 33-41.
- 山下早苗 (2010). 臨地実習をとらえて倫理を学ぶ 小児看護における学生の体験事例を用いた試み. *日本看護倫理学会誌*, 2 (1), 41-45.
- 吉川洋子, 柴麻由子, 田原和美 (2010). 基礎看護学における事例を用いた看護倫理教育の評価. *インターナショナル Nursing Care Research*, 9 (3), 83-89.
- 吉本なを (2011). 看護系大学1年生が考える倫理的判断の拠り所. *日本看護倫理学会誌*, 3 (1), 58-63.